

中古における四段「～アフ」について: 「複数主体」と解し難い例を中心に (上)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7054

中古における四段「アフ」について

―「複数主体」と解し難い例を中心に― (上)

近藤 明

一 はじめに

本稿で四段「アフ」(もしくは単に「アフ」と称するのは、動詞に四段活用の「アフ」が下接したもので、次の「こひしのびあへり」のように、本動詞「アフ」(合・念)の意味が稀薄化していると思われるものである。

①(桐壺更衣の) 人がらのあはれに、情ありし御心を、上の女房などもこひしのびあへり。(源氏物語 桐壺 一〇⑭)

この「こひしのびあへり」について、北山谿太(一九五〇)では、みんなが「様に恋ひしのんだといふ意。あへりの「あふ」は、二つ以上のものが共に同一のことをする意に用ひられる。言ひあふ・泣きあふ・のこひあふ・光りあふ・なげきあふなどの「あふ」は、皆その意である。互にしかじかし

あふといふ現代的意義に解してはならない。(p六四)との見解が述べられている。

確かにこの用例では、女房たちが皆「様に故桐壺更衣のことを恋ひしのんでいるのであつて、女房同士が互いにそうしているわけではないし、まして桐壺更衣と女房たちが互いにそうしているでもない。その点で北山の「二つ以上のものが共に同一のことをする意」との指摘は、妥当なものと言える。以下このような意味の「アフ」を、「複数主体」と称することに⁽¹⁾する。第二節でも述べることだが、中古においては他の四段「アフ」も、概ね「複数主体」の意と見てよい。

しかし数は多くないものの、次のような例があることにも注目したい。

②東の渡殿に、あきあひたる戸口に入々あまたあて、物語な

ど忍びやかにする所に(薫が)おはして

(源氏 蜻蛉 一九七七⑫)

この「あきあふ」を、北山谿太『源氏物語辞典』(平凡社 一九五七)は「戸障子等、共にあく。一様にひらく」、『日本国語大辞典』(第三版も同様)は「いくつかの戸や障子などがすべてともに開く」としており、いずれも「複数主体」との見解のようである。

「渡殿にあきあひたる戸口」とは、渡殿と寝殿の境の戸で、寝殿造りの建物にこのような戸は複数箇所にあったではあろうが、その戸口に集まって物語をしているのだから、ここで話題になっているのはその中の一箇所であろう。その一箇所に戸が何重かになつていたものとも考えにくく、「複数主体」と見て「いくつかの戸や障子などがすべてともに開く」と説明するのは、苦しいと思われる。

このように「複数主体」と解することの難しい「ーアフ」が、数はさほど多くないものの、中古においてある程度見られるのも事実である。ではこのような「ーアフ」はどの把握されるものか、上接動詞にどのような意味を付加するものなのか。またそれは「複数主体」の「ーアフ」に対してどのように位置づけられるものなのか。本稿ではこのような点について、中古、ことに院政期以前の四段「ーアフ」について若干の考察を試みたい。

このような「ーアフ」に注目するのには、もう一つ理由がある。

金水敏(一九九五)において、助動詞「リ・タリ」は、「非限界動詞」に下接して「弱進行態」を表すことはあるが、「限界動詞」に下接して「強進行態」を表すことはないとの見解が示されている。「限界動詞」とは、運動が必然的に尽きる内的な時間的限界を有する動詞、「非限界動詞」とはそれを有しない動詞である。

同論文では、それに関連して、

③ いふかひなき法師・童べも、涙をおとしあへり。

(源氏 若紫 一六九②)

のような「ーアフナリ・タリ」の例がその例外となり得るか否かの議論がなされている。この例の場合、「落とす」は一般的には「限界動詞」に分類されるもので、それに「ーアフ」の伴う「落としあふ」も「限界動詞」になるとすれば、かつこの用例がその動きの進行過程を表しているものとすれば、「リ・タリ」が「限界動詞」に下接して「強進行態」を表している例、ということになる。すなわち、「リ・タリ」が「強進行態」を表さないとの見方に反する例になるのだが、この点を金水は、このような「ーアフ」は「相互動作ではなく、複数主体による多回の動作を表していた」という見方——北山以来の見解に導かれてのものと思われる——のもとに、

「ーアフ」は前述のように、多回の動作を表すものであり、限界動詞であっても多回の動作として見ると、アスペクト的

には弱進行態としての性質を持つ。従つて「ーアフナリ・タリ」は、前項動詞の如何に関わらず、やはり弱進行態と見てよいことになる。

という処理をしている。「ーアフ」がすべて「複数主体」と扱ひ得るのであれば、確かにこれで一通りの納得がいくところである。しかし、現実には数は多くないものの「複数主体」とは解しがた例が存在するのであり、右のような処理には一抹ながらも不安を抱かせるものがある。

金水論文の主旨は興味深いものであるが、それだけに、「複数主体」と解しがたい「ーアフ」の存在が、その論旨に影響を与える可能性があるのか否かの検証という面からも、この種の四段「ーアフ」の性格を把握しておく必要があると思われる。

二 「複数主体」の「ーアフ」

まず「複数主体」の意―北山(一九五六)で言うところの「二つ以上のものが共に同一のこゝとをやる意」―と考えられる例を見ておく。前述のように、中古における「ーアフ」の多くはここに分類し得るものであるし、上代における唯一の仮名表記例である「くもしあふ」(万葉 三三六七)も同様である。

姫野(一九九九)は現代語の五段「ーアフ」について、「働きかけの対象」を分類要素として

相互動作…互いを相手として働きかけあう。(二人が抱きあう)

共同動作…同一の対象を相手とする。(子供たちが犬を抱きあう)

並行動作…同一の場で同じ働きをする。(ネズミがもがきあう)

の三種類に分類しているが、中古の「複数主体」の四段「ーアフ」は、この中の「共同動作」「並行動作」にはほほ相当すると言える。前掲①の例の「くひしのびあふ」は、桐壺重衣という同一の対象を相手にしているのだから「共同動作」ということになるし、③の例や

④大将、左衛門督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひおと

したりしだに、皆おのおの加階しのほりつつ、およすけあへるに
(源氏 少女 六六九⑩)

などは、「並行動作」ということになるだろう。

なお、北山(一九五六)が「互にしかじかしあふといふ現代的意義に解してはならない」と言うように、院政期はともかくとして、源氏物語などの中古和文には典型的な「相互動作」と解されるはつきりとした例は、まだ見られないようである。この時期、動詞に「相互動作」の意を添える役割は「ーカハス」「アヒー」「カタミニ」「タガヒニ」などが担っていたのであろう。

⑤(韻塞ぎのために)その道の人々、わざとはあらねどあま

た召したり。殿上人も太学のも、いと多うつどひて、左右に
こまどりに方分せ給へり。賭け物どもなど、いと二なくて、
いとみあへり。
(源氏 賢木 三三七二⑬)

⑥ やまと歌、あるじも、まらうじども、こと人もいひあへり。

(十五日記 十二月二六日 二八⑯)

右の二例は「相互動作」のようにも見えるが、⑤の場合、「いとみかはず」の例等と比べると、「相互動作」性よりは、「あまた召」された「その道の人々」が「いと多うつど」って競っているという「複数主体」性に重点があるように思われるし、⑥の例も同様である。

この他に、姫野の分類で「相互動作」の二類とされている五段「アウ」にはほ匹敵すると見られる、四段「アフ」の用例がある。それは

⑦ 大荒木の森の下草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな

(拾遺集 二二三〇)

⑧ 御髪は……つやつやとひまなうこりあひて、……五重扇を
ひろげたらんやうに清らに多くこりあひて

(夜の寢見 七五⑤⑦)

の「しげりあふ」「こりあふ」の類である。

姫野は、現代語の「茂りあう・混みあう・ひしめきあう」の類を、先の三種類のうちの「相互動作」に分類し、その中でも「接

触」(更にその下位分類として「集合」という意味特徴を有するものとして)いる。⑦⑧の「しげりあふ」「こりあふ」も、やはり「集合」「密集」といった意に解され、現代語のこの類の「アウ」によく似た性格を持つものと考えられるのである。従って姫野の分類を適用すれば、⑦⑧のような例の存在を根拠に、中古和文においても「相互動作」の「アフ」が存在したと主張できることになる。

しかしこれらは、「相互動作」の一種と見る以外に、複数主体による「並行動作」との関連が強いものと位置づけることも可能でないかと思つ。

これら、中古の「しげりあふ」「こりあふ」の類の例は、いずれもその主体は当然複数であるが、複数主体による「並行動作」でも、その複数が特に多数である(かつ同一の場に存在している)場合、「集合・密集」的な意に解し得ることになると思われる。

姫野が「相互動作」に分類する現代語の「茂りあう・混みあう・ひしめきあう」の類にしても、同様のことが言えよう。現代語「茂りあう・混みあう・ひしめきあう」等の主体も無論複数であり、それが特に多数である(かつ同一の場に存在している)場合、やはり「集合・密集」的な意味になる。この見方をした場合、現代語の「茂りあう・混みあう・ひしめきあう」の類については、むしろ、姫野が「並行動作」に分類して「波・音・粒子の集合体

によって生じる物理的現象」とした「ゆらめきあう・輝きあう・きらめきあう・軋りあう」の類との連続性が重視されることになる。以上、「しげりあふ」「こりあふ」の類の扱いに多少問題はああるものの、中古の「アアフ」の多くは「複数主体」で、姫野の言う「共同動作」「並行動作」に相当することを論じた。これらは

【A・A……（同類の複数主体）】が

【P（同じ動作・状態）】アアフ
と類型化することができよう。①の例では「上の女房」、②の例では「法師・童べ」という同類の複数主体が、それぞれ「恋ひしのお」「涙を落す」という同じ動作をしているわけである。主体の個別性に対する関心や、主体の差に伴う動作・状態の内容・様態などの細かな差といったことへの関心は、これらの例では稀薄と考えられる。

一方、主体の個別性への関心がある程度伴っていそうな例もある。

⑨妻戸の細目なるより、障子のあきあひたるを見入れ給ふ。

源氏 萱夏 八四三⑦

この例は、②の例と似ているようではあるが、「あきあふ」の主体は「妻戸」と「障子」であり、それが同時に開いていた（そのためそこに通りがかった内大臣が、仲にいた近江君の姿を見た）、ということであろう。その点でこの場合は、「戸障子等、共にあく、一様にひらく」（北山『源氏物語辞典』）との説明が当てはまるが、

①②等では複数の主体が十把一からげに扱われているのに比べ、この場合は主体の「妻戸」と「障子」が、同類ながらもやや異質的・個別的なものとして扱われているように思える。

【A・a……（同類だが個別性の意識された複数主体）】が

【P（同じ動作・状態）】アアフ
とでも類型化できようか。また前掲の用例⑥なども、「あるじ」「まらうど」「こと人」といった主体の個別性への関心が伴っているのだが、この例の場合、「あるじ」「まらうど」の歌がこの後引用されているので、主体の個別性への関心に加え、それぞれの主体の動作の内容・様態の個別性への関心もある程度伴っているかも知れない（とはいえず、その動作は「いふ」という同じ動詞で表されるものであるのだが）。その点では【P】の説明を「同じ動詞で表される動作・状態」とでもする方がより包括的であろうか。

現代語の本動詞「あう」については、森田良行（一九七七）に、「Aの具有する事態にBが重なり一致する」という分析があるが、四段「アアフ」を「一致」という観点から捉えようとすれば、複数主体の間での動作・状態の一致、あるいはその動作・状態が時を同じくしているという時機の一致、ということが共通して認められるかと思ふ。

〔注〕

(1) 北山の言う「互にしかじかしあふといふ現代的意義」も、複数の主体による動作であるには違いないが、それらは「相互動作」を表すものとして別に扱う。以下「複数主体」と称する場合、この種のものはいらない。

(2) ただし「涙を」落とす」は、非限界動詞の「泣く」と置き換えても意味に大差はないと考えられるもので、「限界動詞」の典型的な例とするには必ずしも適切ではないように思われる。

金水(二〇〇二)においても、「一をり」の前項動詞が非限界動詞に偏るといふ議論の中で、「涙 落とし」は限界動詞ではないとの扱いを受けている。

(3) 院政期以降では、「鍛ヲ合セテ互ニ打合ヌ」(今昔 卷二五第 十三 ④三九九⑪)、「二ノ龍 互ニ噉合テ戦フ」(今昔 卷十 第三八 ②三三七⑬)、「山鳩三飛来て、くひあひてぞ死にける」

〔寛一本平家 卷一 上二二二⑩〕のように、「相互動作」性が強いと見られる例も見られるようになる。

(4) 「はなはだも降らぬ雪ゆへこちたくも天つみ空は陰相管」(万葉 一三三三三)の傍線部を、「くもりあひつつ」と訓んで雲の密集した状態を表したものだとする、上代に既にこの種の「くもりあふ」も存在したことになる。しかし訓の問題もあるし

(日本古典文学全集・新潮古典集成・新編日本古典文学全集な

どは「くもらひにつつ」と訓んでいる、本動詞「合」の意味が生きているものである可能性もある。なお東京教育大学大学院中田教授国語学ゼミナール学生編『金剛波若経集験記古訓考証稿』(一九七五)には「漢語の『雲合』という熟語にひかれて『くもりあふ』という形が成立したのかもしれない」(p.八三。担当土屋博映氏)との見解が示されている。

(5) 実際、姫野が「輝きあう」の用例として掲げる「たぐさんの瞳がはるかな時間、空間を越えて輝き合っているような状態」(新聞)などは、「複数主体」の中でも特に多数の主体によるものであり、場を一にしない点を除いては、「茂りあう・混みあう・ひしめきあう」の類に非常に近く感じられる。

〔参考文献〕

北山 谿太(一九五六)『源氏物語の新研究 桐壺編』武蔵野書院
金水 敏(一九九五)『いわゆる『進行態』について』築島裕
博士古稀記念国語学論集 汲古書院
金水 敏(二〇〇二)『平安時代の『をり』再考』卑語性の検

討を中心にして(平成十二年科学研究所費特定領域研究(A)の研究成果報告書
古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究)

- 工藤真由美（一九九五）『アスペクト・テンス体系とテキスト
——現代日本語の時間表現——』ひつじ書房
- 関 一雄（一九九三）『平安時代和文語の研究』笠間書院
- 姫野 昌子（一九九九）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 森田 良行（一九七七）『基礎日本語』角川書店

【資料】

（直接引用したもののみ。括弧内の注記がないものは日本古典文学
大系による）

- 万葉集（日本古典文学全集） 土佐日記 拾遺集（新日本古典文学
大系） 源氏物語（源氏物語大成） 夜の寝覚 今昔物語集 覚一
本平家物語
- （本学教員）